

発掘調査の概要

藤原宮跡大極殿院回廊の調査（飛鳥藤原第160次）

藤原宮の中心におかれた大極殿は、東西115m、南北155mの範囲を回廊によって取り囲まれています。今回の調査は、この大極殿院回廊の東南隅にあたり、大極殿院の東面および南面回廊と、更に東へと延びる朝堂院北面回廊との接続部分を対象としておこないました。調査面積は1,425m²。7月1日から調査を開始しています。

調査の結果、推定された位置に、回廊の礎石据付穴と抜取穴を検出しました。この場所は戦前に日本古文化研究所がトレント調査をおこなっていますが、当時は水路や畦畔により調査できなかった柱穴もありました。しかし今回の調査では、非常に良好に残っていた遺構を、面的に検出することができました。

基壇の両端には、基壇外装の抜取溝、さらにその外側には雨落溝にあたる浅い砂の堆積も確認しました。これらの知見から、回廊の規模は桁行14尺、梁行10尺、基壇外装抜取溝の心々間距離で約8.4mとなることが、あらためて確認できました。なお、東西方向の回廊の柱間のうち、1カ所だけ桁行12尺となる場所があるほか、回廊の交差する部分は桁行、梁行とも10尺になっていました。

10月以降、秋の現場班に引き継いで、さらに調査を進めています。現在下層の調査が進んでおり、大極殿院のみならず藤原宮・京の造営過程を解明する手がかりが得られるものと期待されます。

（都城発掘調査部 山本 崇）



調査区全景 後方が大極殿跡（東南から）

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第159次）

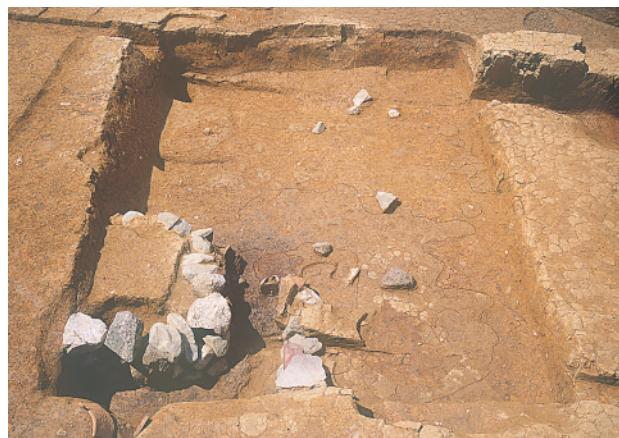
キトラ古墳周辺の国営公園整備とともになう檜隈寺の調査は最終年度を迎え、今年は中心伽藍の北側で6カ所の調査区を設定し、合計約1,500m²を調査しています。

飛鳥の古代寺院の一つである檜隈寺は、渡来系氏族である倭漢（東漢）氏の氏寺と考えられています。過去（昭和）におこなった調査では、渡来系技術の一つではないかと考えられている瓦積み基壇が講堂跡で見つかっています。そして今回の調査では、講堂の北西約25mの地点で、7世紀前半から中頃のものとみられる、石組のL字形カマドをもつ竪穴建物跡を確認しました。

通常のカマドが壁際に設置されるのに対して、L字形カマドとは、焚き口が室内に張り出し、さらに煙道を比較的長く壁沿いに這わせることで、その平面形がL字形や逆L字形であるものを指します。この種のカマドは日本では4世紀から8世紀に存在し、北部九州や近畿地方を中心に確認されています。また、朝鮮半島では日本よりも遅った年代のものが確認されることなどから、渡来系のカマドと考えられています。近隣の高取町では、やはり渡来系の技術と考えられているオンドル状遺構や大壁造建物跡が見つかっています。多彩な渡来系技術の遺構によって、檜隈寺はますます渡来系色を強くしています。

これまでの調査では、檜隈寺中心伽藍となる7世紀後半頃の遺構が主な成果でしたが、今回『日本書紀』に記される、遣隋使、百濟大寺の造営、蘇我氏邸（甘櫻丘）の警備などで倭漢氏が大活躍していた7世紀前半～中頃の遺構を確認できたことは大きな成果といえるでしょう。

（都城発掘調査部 黒坂 貴裕）



L字形カマドをもつ竪穴建物跡（南東から）